王朝文学の形成基盤

雨海博洋

皆さん、お寒いところ、今日はご来会いただきありがとうございます。非常にご丁寧なご紹介にあずかりまして、私も来年（平成九年）三月一杯で永いこと勤めてまいりました二松学舎を去りますので、おそらくそういう意味において、今日話をというような要請があったんじゃないかと思います。

最初は「歌語りと打聞きの世界」で語ろうかなと思いましたけれども、あまり一般向きな話ではないものですから、「王朝文学の形成基盤」というテーマで、もっと分かりやすく、それからもっと大事な、古代文芸の成立、出現というような意味において、語ってみたいと思っております。

勿論古代文芸の出現といえば、それは『竹取物語』を指すわけですが、『竹取物語』の出現というのは、これは『古今和歌集』があらわれた以上に、文学史上一つのエポックメーキング、画期的なことだったわけです。これは大岡信さんも言っているんですけれど、『古今和歌集』があらわれた以上に、この『竹取物語』というものが平安朝の初め頃でたというのは、本当に不思議なことと同時に驚くべき現象です。私も初めて『竹取物語』に取り組みました時に、こんなに難しいものはないと思った。『源氏物語』を読むよりはるかに難しい作品だったということがわかりました。いろいろと未解決な問題がありますけれども、できないできないでは話になりませんので、一応大胆なことを申し上げるかと思いますけれども、本日は古代文芸の物語文学の出現というような感じでお話を申し上げたいと思っております。

とにかく時代というものと、風土というものが、すばらしいものを生むということは一般的にいえるわけです。世界の三大古典の一つとして、『源氏物語』が生まれましたのが一条朝という平安京のまさに文化円熟した時、平和でこそ、はじめて『源氏物語』という偉大な作品ができたわけなんですけれども、この『竹取物語』はむしろ奈良朝から平安朝へという大きな時代の移り変わり、そういうふうなものの余波を受けましてできたということがいえ

ます。

その当時の天皇は平城・嵯峨の兄弟でしたが、だいぶ兄弟でも、性格が違うもので、平城天皇は非常に保守的な天皇でした。桓武天皇の皇子ですけれども保守的な方で、医学の点におきましても、いわゆる中国の漢方医学ではなくて、日本の医学の集大成『大同類聚方』などという医学書を出すくらいの徹底した方ですね、国粋主義の帝と思ってよろしいですね。かたや弟の嵯峨天皇は、これは進歩派であります。中国の文物をどんどん取り入れて、中国の文学、書道など中国人をアッと驚かすようなものも成し遂げた天皇であります。

その二人の間には、衝突が起こらないではおられないわけがありました。藤原薬子という平城天皇が寵愛しました女性がおりまして、この人の挑発にのり「薬子の変」がおこります。薬子は負けて毒薬を飲んで自殺し、平城天皇も敗退いたします。

そして世は、進歩派の嵯峨天皇の時代になります。ますます、中国への志向を強め、遣唐使が頻繁に行き来することになります。その時に、日本の方から橘逸勢とか空海とか最澄とか、そういう留学生、留学僧がどんどんと渡りまして、中国の新しい宗教・文化・思想を取り入れてきているわけです。まさにこの時代を文芸的な言葉で言えば、シュトルムウントドラング、疾風怒涛時代でありました。

このあおりを受けたり、それを吸収して一人の優れた作家が作り上げたものが、私は『竹取物語』であろうと思うわけであります。その価値をいち早く認めたのが『源氏物語』の絵合巻でございます。平安京では歌合を始めとしまして絵合、それから物語合と、物語を合せて、照合する、優雅な行事がありました。『源氏物語』の中の冷泉帝は非常に絵が好きでして、当時は文学を鑑賞するのに絵巻きをもって、鑑賞したわけです。そういうわけで『源氏物語』絵合の巻では、『竹取の翁』に『宇津保物語』を合わせどちらが優れているかというようなことを競い合ったのでした。

ここで左方というのは梅壺六条御息所のむすめです。右側が弘徽殿の女房です。こちらの方には頭の中将がついてます。左側の方には源氏がついております。まずこの左方は『竹取物語』の優れた面を述べております。その時の有名な言葉が

なよ竹の世々に古りにけること、をかしき節もなけれど、かぐや姫のこの世の濁りにもけがれず、はるかに思ひのぼれる契り高く、神代のことなんめれば、あさはかなる女、目及ばぬならむかし

とあります。『竹取物語』は非常に古くて、普通の人々は理解できないがすばらしいものであるというようなことをいうわけです。

この場面で、「物語の出で来はじめの祖(おや)なる『竹取の翁』」という言葉が出てくるのに注目したいと思っております。「物語の出で来はじめの祖なる『竹取の翁』」と『源氏物語』の作者、紫

式部がしかと書き留めております。しかも、あの先の方を読んでみますと、この「阿部のおほしが千々の黄金（こがね）を捨てて、火鼠の思ひ片時に消えたるも」と、阿部の大臣が巨額の金を使って、偽の火鼠の皮衣を得て、失敗するという話とか、それから庫持の皇子というのがおりますが、五人の貴公子の中では一番悪者に扱われています。この皇子には蓬莱の珠の枝というのを注文されます。そんなものありっこないもので、偽物を作らせて、ごまかそうとしましたけれども、これも失敗しました。こういうところは右方の方から言いますと、『竹取物語』の欠点であると盛んに批判するわけですが、この内容はとにかくすでにもう庫持の皇子とか、阿部のおほしとか、こういう名称が出ております。すでにこの当時は、『竹取物語』はだいたい現在と同じくらいのものが出来上がっていたのではないかと思っております。

『源氏物語』より前にできました歌物語の『大和物語』にも『竹取物語』の内容を踏まえた話が出ております。

『大和物語』七十七段に「同じ皇女」とありますが、これは宇多天皇の皇女です。桂の皇女（みこ）ともいわれました。桂は月の桂といったふうに連想できました。「同じ男」というのは源嘉種という、位の低い男で五位でした。内親王さまと位の低い男とはとうてい結婚できません。しかし、美しい桂の皇女に恋い焦がれていたんです。八月十五夜に共に愛を語ろうと思ったときに、院、宇多法皇の方から月見の宴があるので出て来ないかといわれたので、やはり父の院からいわれたものですから、桂の皇女は宮廷の方に行くわけです。それを見て、歎きまして、詠んだ、嘉種の歌です。

竹取がよよに泣きつつとどめけむ
君は君にと今宵しもゆく

（昔竹取りの翁が泣きながら、一生懸命にかぐや姫をとどめたのですが、かぐや姫をとどめかねたように、あなたは、あの法皇のおめしにのって、今宵おいでになるのをとどめたいのです。）

と歎いておりまして、ここにも、すでに『源氏物語』の前にこのような『竹取物語』を踏まえた話があったということがわかるわけです。

しかし、この『竹取物語』はもともとは必ずしも『源氏物語』、『大和物語』にあったと同じものではなかったと思われます。形、内容はあまり変わらないものですけれども、様々な文章の分析によりますと、現代の『竹取物語』は漢文というものを訳しなおした形跡があります。国語学的にみましても漢語が非常に多かった。最初は漢文で書かれていたんじゃないかと、これはかなり有力な説であります。またそれより以前に、この竹取の翁の説話めいたものが、世の中にあったというふうに思われます。例えば『万葉集』巻十六を見てみますと、

昔老翁ありき。号を竹取の翁と曰ひき。此の翁、季春の月にして、丘に登り遠く望むときに、忽に羹を煮る九箇の女子

に値ひき。百嬌儔無く、花容止無し。時に、娘子等老翁を呼び嗤ひて曰はく、叔父来りて此の燭の火を吹けといふ。（下略）

というような話があるのですね。その乙女たちは非常に美しい女性ですから、竹取の翁はたまたま神仙にあい、この世のものではない遠い遠い神の国とか、そういうような所から来た人であろうというふうに、思うんですけれども、九人の乙女がこの丘に集まりまして、野菜を煮て食べる。それを見て竹取の翁が寄ってきまして、乙女たちとあれやこれやとしゃべるんです。けれども、こういうような世俗の翁が神仙な乙女にこのように直接語りかけることは、非常にまずいことなので、謝罪の歌を詠むという話です。竹取の翁のこういうような話がいくつかあったようで、この他、『今昔物語集』の中にも竹取の翁の話があります。

竹というのは、神秘的な植物でして、成長が早いのです。スクスクと成長しますので、そこに神秘的なものを感じるということになってまいります。かぐや姫も竹の中から誕生し、三月の間、あれあれという間にスクスクと成長する、異常成長です。これは竹の精というふうなものとマッチするわけです。

竹というものは、非常に神聖なものである。それを取り扱う人、竹取の翁、そこにまつわる話が恐らくいろいろあったのではないかと、私は想定しております。その一つを吸収して、優れた作家が現在の『竹取物語』の原形とも言うべきものを、書いたということが言えるのではないだろうか、というふうに思われます。それだけではなくて、『源氏物語』には、この絵合巻以外の蓬生の巻には、かぐや姫の物語という名称でも扱われています。竹取の翁物語、かぐや姫の物語という、二つの名称があったということになってくるわけです。

これは今申し上げましたように、竹取の翁にまつわる神仙譚というふうなものと、もう一つは白鳥説話のかぐや姫の話と、そういうような系列が、ここでドッキングするんです。これはものすごく、見事な作家的手腕と思うんです。やがて、竹取の翁は、竹を伐る度に黄金が出てきてだんだんと財産ができ俗っぽくなってまいります。そして金の次には名誉がほしいのですね。それにまつわる五人の貴公子の話が登場します。何れも、藤原京文武天皇時代の、いわゆる第一線級の政治家、皇子や大臣、大納言、中納言といった五人の貴公子の姫への求婚を喜んだのは翁でしたが、作者は姫を通して当時の政界を牛耳っていたこれらの貴公子に対して、痛烈な批判をさせていくわけです。これはなかなかもって、勇気のある発言だったと思います。私はなぜ「今は昔」という言葉が、初めて『竹取物語』に使われたかは、そこに理由があるだろうと思います。

『竹取物語』の出だしの部分、「今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。」とあります。「今は昔」、本邦初の登場であります。これまでは、「昔翁ありけり」とか、「昔乙女ありき」とか、そ

ういう話はありましたが、『竹取物語』は「今は昔」とはものすごく新しい、斬新なる発想です。なぜ必要であったかというと、『今は昔」といいますと、昔と現在、現在というものを、はっきり区分する。これは昔の事実であって、今は非現実の世界だと。昔は現実の話であったとすればそこに自由に批判が加えられるんです。いろんなことをいわれるとしても、いやもう今は昔だと、こうなるわけです。逃げることもできますね。時代を昔にもっていって、現実を批判するという方法があるんです。これが『今は昔」の出現理由と私は思っています。

そして、このかぐや姫の物語の始まりは、「今は昔、竹取の翁といふ者ありけり」から始まり、「その煙いまだ雲の中へ、立ち上るとぞ言ひ伝へたる」というところでもって終る。全く首尾一貫しているのがわかりますね。かぐや姫の誕生から、かぐや姫の昇天というのをもってきて、その始めと終りの間に五人の貴公子などに、痛烈な批判を放ちます。正に風刺文学ともいうべきです。文学の価値の一つはやっぱり風刺ということが大事であります。社会を批判風刺するということは、文学の大きな使命であろうと思います。同時にまた、かぐや姫を通してのロマンですね。竹の中から生まれて、やがて八月十五夜の晩に、月の世界に去って行くというメルヘンの世界が展開しています。このような一つのロマンと、一つの現実的な問題とを見事にあわせて描ける作者は相当な人であると私は思います。

奈良朝末期から平安朝初期にかけて、留学生、留学僧なんかが持ってきた中国の有名な本がいくつかあるんです。例えば『遊仙窟』という本があります。今でいえばポルノ小説みたいなもので、日本の留学生にはとても人気があり、異国の地に寂しくしていた時、それをみて心を慰めていたようです。なにか非常に日本人の留学生とかが買うもんですから、洛陽の市価を高めたというくらいで、『遊仙窟』は本家の中国には残ってはおらず、日本から逆輸出しておるわけです。

そういう神仙思想などの刺激受けまして、平安朝の初期頃には、『柘枝伝』・『浦島子伝』など続々と奇伝的な作品が出現しました。それから日雄上人の『睡覚記』とか、滑稽小説のようなものがたくさんありました。このように様々な漢文の説話、伝記類が出現したんです。一方空海もまたこの時代に中国から密教を持って帰ってき、あの「聾瞽指帰』を書き直し、『三教指帰』としました。「三教」とは三つの教えです。つまり儒教、道教、仏教のことで、この三つの教えの何れが優れているかということを一つの擬人法によるドラマ形式で論じたものです。結局最後に仏教という点に帰してしまうのです。空海という人は、その三つに通じていたのであります。

空海は『三教指帰』の序文の中で『遊仙窟』や日雄上人の『睡覚記』を批判している。「この二作は何れも古人、先輩の残した名篇ではあるが、一つは卑猥、もう一つは滑稽でとても後人を教

戒することのできるような作品ではない」、というふうに批判しております。

このような背景を受けて、平安朝初期の嵯峨天皇の時代、ある優れた人が中国から伝来してきたもの、日本古来のもの、様々なものを集大成して、仕上げたものが原『竹取物語』で漢文で書かれた物語であろうと、思うのです。

これを和訳して歌を付け加えた人が僧正遍昭であるという説は、かなり認められております。遍昭はこの原作を手に入れるのにふさわしい立場にあった人なので、漢文の方には歌は入ってませんでしたけれども、遍昭は六歌仙の一人であったので歌を物語の中にはめこんだのです。『竹取物語』の歌と、それから遍昭の歌は非常に類似しております。そういう点で、私も現『竹取物語』は遍昭の手を経て成ったという線を取っております。とにかく、このようにしまして、様々な要素を取り入れて出来上がりましたものが『竹取物語』ではないかと思っております。

まず、『竹取物語』を読みながら、この古代文芸が形成される過程を、なるべく簡単にお話し申し上げたいと思っております。

「今は昔」というのは『竹取物語』以前にはない新しい意味のある表現です。つまり出だしから、一つの新しい文芸形態をとっております。「今は昔」とすると、過去と現在とが判然と区切られ、現在という観点から過去を眺め、現在ではない遠い過去のことですから、かなり自由な批判も加えることができるのです。

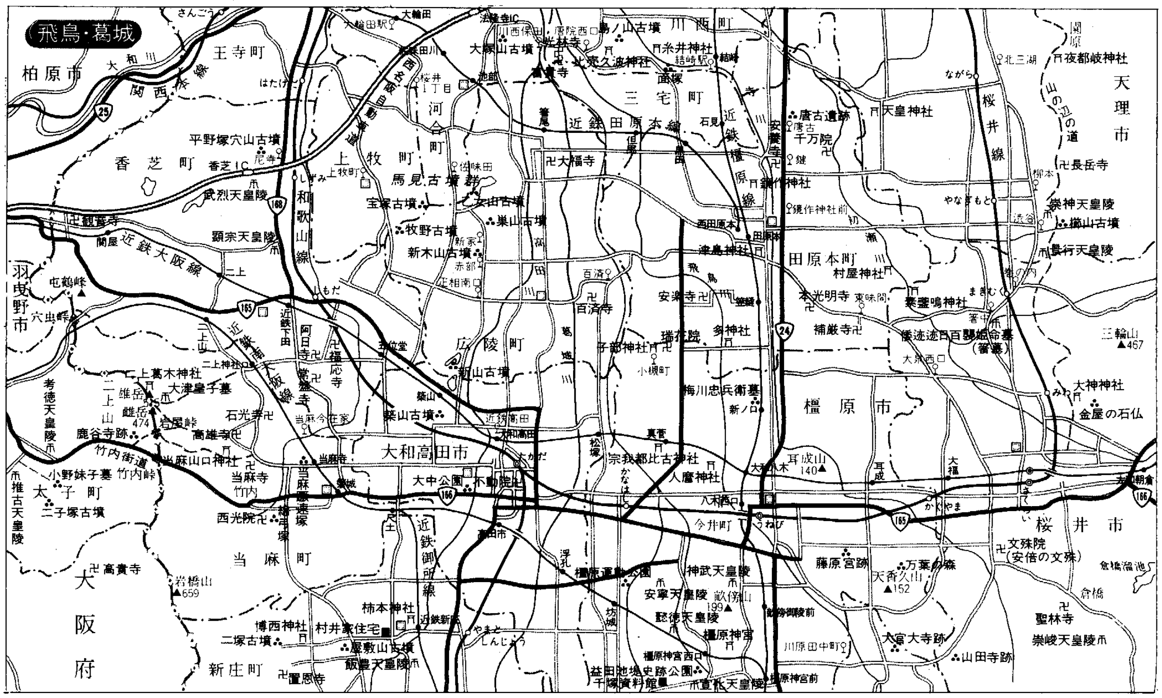
「竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて」の野山ですけれども、一般の説は、野や山というふうに解釈しました。私もそう思っていましたが、先輩の故塚原鉄雄教授が、「野山というのは、野の中にある山で、小高いところじゃないか」という教えを受けまして、私もそうだなと思ったんです。その理由もだんだん進んでいきますと分かってくるんです。この舞台背景となったと思われる地図をあげておきます（次頁参照）。

そこで、この目的の場所は、左上の河合町。このところに馬見古墳地帯というそんなに高い所じゃない丘陵地帯があるんですね。小高い丘というのは、わりあい広い所です。このあたりが、だいたい『竹取物語』の舞台背景となると思うのです。

とにかく、この作者は、この奈良という地をよく理解できる人であります。やはり奈良の地にあっていろいろと勉強した僧侶ではないかと思われます。三谷榮一博士もそう述べておられます。私は更に突っ込んだ見解をもっておりますけれども、本日はそこまで申し上げません。

この馬見丘陵地帯の麓を流れている大和川という川が左の上の方にあります。当時大きな川で、そこに初瀬川、飛鳥川、葛城川が合流しています。

馬見丘陵地帯は昔から暖かい所だったらしいのです。それで穀物なんかがよくとれた所であったらしいのです。考古学上の結果も出ております。また古墳地帯で、ここにはかつて非常に多くの



人々が住んでいたことがわかります。それは大和川が近いからでしょう。大和川は瀬戸内海に注いでいます。そして、当時、海のシルクロードと言われて、かなり大きな船が初瀬川まで遡る時、この馬見丘陵地帯のほとりを通って行くわけです。

「竹を取りつつ、よろづの事につかひけり。名をば、讃岐の造となむいひける。」

「讃岐の造」、ここに一つの馬見丘陵の謎を解く鍵があります。讃岐というからには、やっぱりこの四国の讃岐であろうと思われます。讃岐は温暖の地でありますから、中国南部から伝来した孟宗竹とか真竹とかが繁茂したわけであります。この竹はもともと神事に使ったわけですね。そうしますと、奈良の朝廷から竹を献納することを申し付けられます。

それは『古語拾遺』という、斎部氏の歴史を書きました本にも出ております。名付け親の三室戸斎部の秋田。これも斎部氏です。中臣氏というものが、藤原氏を背景に勢力を持ってまいります。斎部氏はかつての座からどんどん追いやられてしまいます。斎部氏はこういうものじゃなかったと。昔、栄光の時代もあったというようなことを書いたものが『古語拾遺』という書物であります。この『古語拾遺』によりますと、毎年讃岐の国から竹竿八百を貢進すると書いてあります。当然瀬戸内海から海を渡り、大和川を遡ってやってきて、それで荷物を下ろす辺りにもやがて、竹が繁茂するようになったと考えられます。そこが、馬見丘陵地帯の三

吉で、現在は河合町の三吉となっています。ここにやはり讃岐の人々が居ったということを物語っているのではないかと思うのです。

讃岐の国から、竹を運んできて、そこにいったん荷物を下ろし、集積して、竹を管理した場所ではないかと思われます。そういう点からも、この讃岐の造麻呂がそれらの竹を見張ったり、取り扱った人ではないかと思われます。

竹は神事に使いますから、讃岐の造麻呂も讃岐神社の神官であったと思われます。讃岐の神社も馬見丘陵の傍にあります。現在も朽ちかかって、本当にあの竹取の翁が顔を出してくるような古色蒼然たる神社であります。

その竹のもとに光る竹がひとつあったというんですけれども、これがかぐや姫の誕生です。大きさが三寸ばかりですから、やはり、こういうものが生まれるというのは、ある程度太い竹でなくてはならないわけであります。日本には実は鶯姫の物語がありまして、私はそれが原形ではないかなと思うのです。『海道記』という本に、

「昔、採竹翁といふ者ありけり。女を赫奕姫といふ。翁が宅の竹林に、鶯の卵、女の形にかへりて巣の中にあり。」

竹の中で生まれたのではなくて、笹薮の中に鶯が卵を生んで、それがかえって美しい娘かぐや姫となったという話があります。ある程度もとの話を伝えているのではないかと思われます。日本ではそういう太い竹はなかったので、竹が中国から伝来しまして、初めてこういう話が登場するのです。中国にも四川省の金沙江にまつわる斑竹姑娘の話があると伝えられております。斑竹から生まれた娘と五人の若者との話があるんですが、だいぶ『竹取物語』の五人の貴公子との話と似ているもので、これが発表された時にはびっくり仰天しました。ところが一つの新説がでるというと、様々な批判をするのが学会でして、いろいろ意見が出ました。たった一つの例話からとか、また書いた人を本当に信用できるのかどうかと、それから四川省の金沙江のあんな中国の最果ての所からどうしてその話が伝来したんだとかね、様々な批判がありました。

たまたま私が中国の雲南省の少数民族学院の方にちょっと勉強に行ったときにも、竹から生まれた竹氏族という少数民族が発見されたばかりだったんです。当時五〇〇名位の民族が発見されたそうです。まだ他にももっと竹氏族が居るかも知れません。彼等は竹から生まれたという伝承を持っているんですから、竹にまつわる様々な民話・説話を持っているんじゃないかと思います。それから、貴州にも竹にまつわる話が沢山あるそうです。これからも竹説話をどんどん調べて、再度斑竹姑娘の問題に挑戦しなければならないと思います。

先に述べましたが、かぐや姫の物語の古形をわずかに残していたのが、この鶯姫の物語でありまして、鶯は竹薮の中に生まれる

わけですけれども、『竹取物語』のは、竹の中からパーッと光り輝いて、かぐや姫の誕生となって行くわけです。そういうような、しかも、この発見者は讃岐神社に仕えておりました。讃岐の造麻呂です。

「わが、朝ごと夕ごとに見る」とあるように、竹取の翁が見回る竹ですけれども、この竹は神事に使う神聖な竹であります。翁は姫を「子になり給ふべき人なめり」と、自分の子供となるべき宿命的な出会いとして受取っております。したがって竹の中から生まれたその幼き子に「給ふ」という尊敬の言葉を使っているのは、普通の人間ではない神仙の子として尊敬の念を払ったと思われます。

その子を持ち帰りまして、家の中で養ううちに、竹の如く、すくすく育ちまして、

「三月(みつき)ばかりなる程に、よき程なる人」

になったとあります。成人したというわけで髪上げさせ、裳を着せまして、成人式をさせます。実に三月で成人するとは実に早いものです。やっぱりこれは天女なればこそです。しかも、

「この児の容貌(かたち)けうらなる事」

と述べてあります。清らは最高の美しさです。本当ならば身分が高くなければ、つかわない言葉ですけれども、ここは非常に気高き誕生というものから「けうら」を使ってもいいのではないかと思います。しかも家の内は「光り満ちたり」という美しさと神秘的な光が満ちてます。この光を見たときに、翁は苦しいときにも苦しさが止り、腹が立ったときも、この子を見れば気持ちが慰んだというように、この子の持っている一つの不可思議な神秘的力をここで述べております。

一方、竹取の翁は、このかぐや姫の持参金ともいうべき竹を取るたびに、ザクザクと黄金が出るので、

「勢猛(いきほひまう)の者になりにけり」

というように翁は大変に金持ちになりました。

そもそも経済力を持った翁は、やがて金から名誉へと移って行って、五人の貴公子のうちの、誰かと娘を結婚させようというような欲望へと変わってゆくんです。それでだんだん翁は俗化して行くわけです。従いまして、かぐや姫は、天上に帰るときに、不老不死の薬を本当ならば翁に渡すべきなのに帝に渡して天上に去って行く。これは一体何か、ということですね。姫は翁に対しても批判というようなものは持っておりました。やっぱり人間の敵は金です。そういうことを作者は痛烈に批判しています。親愛なる翁まで、そういうような面でもって俗化してゆくのを歎きます。かぐや姫の昇天の際、あの天上から迎えに来たあの王とおぼしき人がいうセリフがあります。

「汝、幼き人。いささかなる功徳を翁つくりけるによりて、汝が助けにとて、かた時の程とて下ししを、そこらの年頃、そこらの金賜ひて、身をかへたるが如なりにたり。かぐや姫は、

罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれが許に、しばしおはしつるなり。罪のかぎりはてぬれば、かく迎ふるを」

という重大発言をしております。

なぜ、かぐや姫を翁に託したかというと、翁は功徳をつんだからと言います。翁は清浄な、竹を管理するような生活をしていた人であります。従って、この翁に月の世界の姫をあずけるということになったのでしょう。

姫は天国を追放されました。その罪はどういう罪か分からないのです。あの五人の貴公子のプロポーズという色恋の話でもって、責められるところからみますと、この罪のもとは、あるいは禁断の実を食べたのかなという感じがします。五人の貴公子の求婚を無事に切り抜けた時に、讃罪ができたということになるので、やはりそういう背景を持っていると考えております。

翁はやがて金持ちにもなり豪華な邸宅も建てました。さてそこで、姫は成人式を迎えることになります。その折名前をつけなければなりません。三室戸斎部の秋田を名付け親として、名前を付けてもらいます。

よく名前を付けてもらうときには、しかるべき一族の長に付けてもらいます。この三室戸斎部の秋田もまた同じく、斎部氏系統のいわゆる長とみてよろしいと思います。三室戸斎部の秋田の三室は御室（みむろ）・御諸（みもろ）と同じで、神社の神域の意であり、「諸」は山などの並んだ所ともいわれ、「戸」は山々が狭まった所または水の流れる所で、馬見丘陵の東北奈良盆地の全河川が合流する広瀬郡城戸郷（きのへ）（『和名抄』）を指すのではないかと思われる。ここに広瀬神社があり、今も古色蒼然たる、あまり整備されていない社が残っております。当時は龍田神社とともに官幣大社です。龍田神社は風の神様で、こちらの広瀬神社は水の神様というような、勅使が派遣されるような大きな社です。大きな神社ですので、いくつか摂社、末社というのを持っているわけであります。

『広瀬神社社記』によれば、「広瀬神社旧摂社散吉社」とあります。散吉（讃岐）社は摂社ですから、本家にあたるのが、この広瀬神社であります。秋田は「秋の田」ですから、これは収穫に関係があります。ここの神は「食物の守護神若宇賀能売命（わかうかのめのみこと）」という、食料の神なのです。

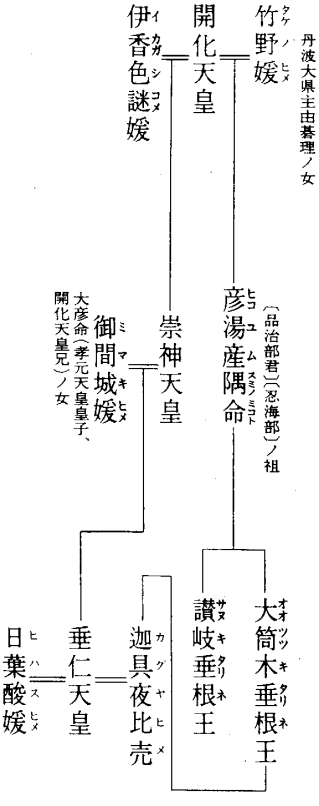
『丹後国風土記逸文』の中に次のような伝説があります。丹後国比治の里の真奈井に八人の天つ乙女がおりてきて、水浴みをした、そのうち一人の天人の羽衣を老夫婦がとりかくしたものですから、天に帰れなくなってこの地に留まりました。この老夫婦は子供がいないので、自分の子供として養うことにします。

この天女はよく醸（か）み酒を作ります。この天女の作った醸み酒はものすごく霊験あらたかで、これを飲むと病んでいる人がなおった、というような話で、それを求める人々が多かったので、この夫婦は富み栄えましたが、いつのまにか邪険にして、この天女を追い出すのです。追い出されて、やってきたのが竹野の郡奈具の

村です。これがいわゆる「竹野の郡の奈具の社に坐す豊宇賀能売命」という神、食料の神です。この広瀬神社の若宇賀能売命も丹後の奈具社の豊宇賀能売命の系列ということになります。

また『帝王編年記』に「与胡の海」の白鳥伝説があります。どうやら日本海方面に多い話のようです。

そこで、三室戸斎部の秋田をよんで、姫の名は「なよ竹のかぐや姫」というふうにつけたとなっております。若々しい竹、なよたけ、かぐやは輝かしい光を発する美しい姫という意味です。そのかぐや姫という名は『古事記』にも載っております。



実は実在の迦具夜比売がいたのです。垂仁天皇の妃の一人です。また『竹取物語』の五人の貴公子は、垂仁天皇系統と縁のある人が多いということも、面白いと思っておりました。

迦具夜比売の父は大筒木垂根王です。かぐや姫の養い親は讃岐の造麻呂ですけれども、ここでは讃岐垂根王という風に、何か『竹取物語』の内容と関連があるようなことが誌されていることは、こういう古代史的な面にも作者は通じていたというわけです。

こういう古代、説話的な世界を持って来たという点は驚くべきです。しかも更にさかのぼり「彦湯産隅命」の上をいきますと、「竹野媛」がおります。「丹波大県主由碁理ノ女」とあります、これが先程申し上げました、『丹後風土記』の「奈具社」の竹の姫の系統をひいていると思われます。そのようなつながりをもって物語を展開しているのは非常に面白いと思われます。

それだけではありません。美しい姫が昇天するというような話などどういうところからきたかという点です。八月十五夜の名月を鑑賞というのは、古来日本にはなかった行事です。中国から伝わってきました。八月十五夜、仲秋の名月の話が出てくるのも、この『竹取物語』が初めてであります。その時、姫は昇天して、わがふるさとの月の世界へと帰って行くのですが、これもまた、新しい一つの資料をとりいれているというふうに感じます。

また、もう一つは、有名な中国の神仙譚で、姮（嫦）娥伝説というのがあります。菅原道真の『菅家文草』『新撰万葉集』にも見られるように、平安時代にはすでに姮（嫦）娥伝説、すなわち天女を月宮の人とする見方があったと思われます。この中国神仙譚の一節を日本で取り入れた、ということです。

姮娥伝説は中国神仙譚の一種で、羿という男が西王母（天帝の娘）から授かった不死の薬をその妻姮娥が盗み飲んで月に走り、月の世界に住む人となったというような話です。

かぐや姫はこのように日本古来の羽衣伝説とそれから中国の神仙譚の姮娥伝説の二つから形成されたものです。このような内容をもってなる『竹取物語』はまさに驚くべき文学であります。

さらに五人の貴公子の様々な問題にふれてみたいと思います。五人の貴公子は「その中に、なほいひけるは、色好みといはるるかぎり五人」と言われております。「色好み」という言葉が初めて使われるのも、この『竹取物語』であります。『竹取物語』に「今は昔」、「八月十五夜」、それから「色好み」などは初めて文学に登場した注目すべき用語です。また、色好みに欲望とか権力とが絡んでは駄目なんです。この五人の貴公子、毛並みもよろしい、それから、教養も経済力もあります。石作皇子、車持皇子、右大臣阿倍のみむらじ、大納言大伴御行、中納言右上麻呂足、この人々は五人の貴公子として登場して、かぐや姫にプロポーズをするんです。かぐや姫は困りまして、この人々に難題をかけます。

石作皇子には「仏の御石の鉢」とか、車持皇子には「東の海に蓬来（蓬莱）といふ山あるなり。それに銀を根とし、金を茎とし、白き玉を実として立てる木」を取ってきて下さい。それから右大臣阿倍のみむらじには「唐土にある火鼠の皮衣」を、大伴の大納言には「龍の首に五色に光る玉あり」、それを取ってきてほしい。石上の中納言には「燕のもたる子安の貝、ひとつ取り給へ」と。燕と子安貝、別々ならありますけれども、二つ合わせたのはないんです。

こういう難題を吹きかけました。これらは神仙譚の中に入ってくる話が多いので、とても普通では考えられません。これを聞いて翁は驚き姫をたしなめます。

「難き事どもにこそあなれ」

そりゃあむずかしいよ姫。この国にあるものじゃないじゃないかと。姫は、いいえ、なんにも難しいことはありません。成人式をすましたばかりの若い女性がこんな想像もつかないことを言うのです。このような常識では考えられないことをするというところに、彼女は天女または変化の人と言えるのです。

とうとう五人の貴公子はそれぞれ難題に失敗して、散々なめにあうんです。しかし帝は、自分が信頼する皇子や家臣が失敗したことは面子にかかわることでもありますので、姫を天皇の権力でもって呼ぼうとするのですけれども、これに対して、姫はこの国の人間でないから、帝の命令に従う必要はないといった大胆な発言をします。時の為政者たちの面子をつぶし、帝に対しても大胆な発言します。そのためにも「今は昔」という言葉が必要となってくるわけです。

そのような風刺を放つところに『竹取物語』の一つの文学的価値があるのです。

加納諸平の『竹取物語考』に五人の貴公子のモデルと同時に、帝は文武天皇であろうと述べております。藤原京時代は、持統・文武・元明の三人の帝で、男の帝は文武天皇だけで、あとは女帝

です。それ故、「帝」は文武天皇でよいわけです。

この天皇の時に初めて鷹司を置いたのです。鷹を養う役所で百済からやって来ました人々に鷹を養わせたのです。百済寺とか百済神社というものが、馬見丘陵とそれから藤原の京の中間地帯にあります。こういう百済の人々が多くここにいたので、そういう神社とか寺があったのです。

そのような人々が、鷹を飼って、鷹狩りを教えたということが記録に残っております。それが文武天皇の時代です。

天皇は鷹狩りの場所を馬見丘陵地帯、そこに行ったついでに、急に翁の家に入り込んで、かぐや姫を拉致しようとする気持ちを持ったのです。

しかし、姫は最高の権力者、帝に対しても大胆な発言だけでなく、強引に姫を引っ張って行こうとすると、姫はパッと透明人間になって姿をかくしてしまうのです。これには最高権威の帝はどうしようもなく、権力を行使する非を知ります。

この文武天皇は文学をも愛し詩文にも通じた、非常に優しい人であったというふうに記録にも載っております。そこで、こういう強引な五人の貴公子のような強引なことはせずに、もう権力を使うことを止めまして、折々に歌を詠んで、かぐや姫と心のまじわりをします。かぐや姫はそのような帝に心ひかれていくのです。姫が月の世界に帰るときに、この世で一番心をひかれた人は、この帝であろうと思うことができるわけです。不死の薬を与えたのは翁ではなく帝なのです。

しかし帝は大臣、上達部を召して、

「いづれの山か天に近き」

とお問いになると、ある人が

「駿河国にあるなる山なん、この都も近く、天も近く侍る」

と申し上げました。そこで

「逢ふこともなみだに浮かぶ我が身には
死なむ薬も何にかはせむ」

の歌を託し、富士山の頂上で不死の薬を焼かせたのです。実はこの富士山は、崑崙山に通ずるといいまして、神聖なる山であると見ていたようです。これも道教の神仙思想に基づくものと、渡辺秀夫氏は「竹取物語と神仙譚」（『日本文学』一九八三・三）の中で述べられ、最も天上近き山、富士は、天上と地上をつなぐ通路としての崑崙山のヒナ型といえようと、道教思想の影響の強さを説かれています。かぐや姫昇天の折の迎えの場面も諸説、阿弥陀聖聚来迎の如く解されておりますが、〈仙伝〉の視点から読解すべきとも説かれています。たしかに『竹取物語』には、「仏」ということは述べられておりません。「立てる人ども」「王とおぼしき人」「天人」といった表現で、仏とはとれません。ひとりの天人がかぐや姫に、「壷なる御薬たてまつれ。きたなき所のもの、きこしめしたれば、御心地、あしからむものぞ」の中にも、不死の薬のことが入っております。不死の薬は道教上の仙薬です。

さて、「今は昔」にはじまった物語の結びとして「とぞ言ひ伝へたる」でしめくくられております。竹の中から光り輝くかぐや姫の神秘的誕生からはじまり、仲秋名月の中への昇天、さらに煙を噴く富士山で幕を閉じる壮大華麗なフィナーレの大ロマンが語られております。その間に石作皇子、車持皇子、右大臣阿倍のみむらじ、大納言大伴御行、中納言石上麻呂足といった、『日本書紀』『続日本紀』などに名声を駆せ、栄誉を賛えられた五人の貴公子への痛烈な風刺、また敬愛すべき翁に対しても、人間批判的行動を示しています。始め清純な翁が、莫大な金銭を得て、権力にこび、名誉欲に傾いてゆきますと、姫の心は離れてゆきます。ですから不死の薬も当然翁へ与えられてよいはずなのに、帝に授けてしまいます。大ロマンと風刺のかもす素晴らしい物語が出現しました。

以上、『竹取物語』が素朴な竹取説話から、『古事記』『日本書紀』『続日本紀』『古語拾遺』『富士山記』や仏教・道教・中国説話など、内外の様々な世界を取り入れて、複雑・高度な物語へと成長しました。

一応、時間がきましたので、締めくくりを早めて申し訳ございません。